

◆アカデミー賞授賞式が暴いた多様性の光と影

三牧 2024年3月に行われたアカデミー賞授賞式は、アメリカの多様性の実態、さらには欺瞞ぎまんを示す好例だったと思います。

まず印象的だったのは、あれほど多様性を称賛し、セレブリティの「政治的発言」を称揚してきたアメリカのエンターテインメント業界でも、イスラエルとパレスチナ自治区ガザ問題に関しては、政治的意見の多様性が許されず、イスラエル批判を行ったセレブリティが批判され、意見が封殺されることが露呈した点です。

アカデミー賞授賞式に参加したセレブリティの中には、ガザ停戦を訴えるピンバッジを着用する人もいましたが、アメリカの強力な軍事支援のもと、イスラエルの軍事行動によって、その時点で3万を越すパレスチナ人が亡くなっている事態を考えれば、控えぬすぎる停戦アピールでした。そうした中、沈黙を破ったのが、『関心領域 (The Zone of Interest)』の国際長編映画賞と音響賞を受賞したユダヤ系イギリス人監督ジョナサン・グレイザーでした。彼は、受賞スピーチで「人間性の喪失が最悪の事態を招くということ

伝えている」と述べた上で、こう続けました。

「私たちは今、ユダヤ人であること、そしてホロコーストが乗っ取られ、罪のない多くの人々を巻き込む紛争の原因となった占領を正当化することを拒む人間として、ここに立っています。10月7日に殺害されたイスラエルの人々、現在攻撃されているガザの人たち、皆が人間の喪失による犠牲者です」

ホロコーストを経験し、その経験を集団的アイデンティティの中核に据えてきたユダヤ人だからこそ、ガザで進行している大量虐殺は許すことはできないという決意に満ちたスピーチでした。壇上でスピーチを行ったセレブリティの中で、ガザに言及したのはグレイザーだけでした。

彼の受賞作『関心領域』は、ガザ情勢に沈黙する人々への問いを含む作品でもあると私は感じました。アウシュビッツ収容所の隣に住んだ同収容所の所長ルドルフ・ヘスとその家族を題材にした映画なのですが、ヘス一家の「平穩」な生活は、すぐそばで行われているユダヤ人の大量虐殺を「関心領域」の外に置くことで成り立っていました。映画にユダヤ人はほとんど映し出されませんが、ヘス一家の生活がユダヤ人の物品や労働力の搾取の

上に成り立っていることをうかがわせる演出は随所に施されています。こうした演出により、ユダヤ人に対する明確な加害者であり、ユダヤ人からの搾取によって利益を得ていた存在でありながら、その苦しみにはまったく関心を寄せなかったヘス一家の罪深さがよく表現されています。

ガザで続く無差別的な軍事作戦。ガザでの軍事封鎖やヨルダン川西岸におけるイスラエルによる暴力的な入植活動。そうした現実を知らながら、軍事支援を続けてきたアメリカ政府。イスラエルによる軍事作戦や占領に加担し、そこから利益を得てきた企業。人権や多様性をうたいながら、ガザの問題には沈黙を続ける多くのセレブリティたち。グレイザーの批判は、現代のガザに関する沈黙にも当てはまるところがあるのではないのでしょうか。

しかし授賞式でのグレイザーの演説は、「ナチスとイスラエルを同一視している」「世界中で反ユダヤ主義を助長する」とユダヤ系コミュニティからの大反発を巻き起こしました。すぐさまハリウッドのユダヤ系クリエイターらが抗議文書を公開し、賛同者はほどなく1000名を超えました。もっとも4月に入って、150名超のユダヤ系クリエイターが連名で、グレイザーの発言を支持する公開文書を発表しました。この業界が大切にすべき、

言論の自由や異議申し立てを抑圧する風潮に抗<sup>あらが</sup>う、と。この頃から、アメリカの世論調査でも、イスラエルのガザでの軍事行動への反対が賛成を上回るようになり、アメリカがイスラエルに軍事支援することへの懐疑や反対も大きくなってきていました。

また、ハリウッド的な多様性の欺瞞についていえば、『哀れなるものたち』で主演女優賞を受賞したエマ・ストーンと、『オッペンハイマー』で助演男優賞を受賞したロバート・ダウニー・Jr.の振る舞いが、「アジア人蔑視ではないか」との批判を呼びました。受賞者に贈られる「オスカー像」は前年の受賞者から手渡されるのが通例ですが、ストーンは、中国系マレーシア人俳優ミシェル・ヨーからは受け取らず、ジェニファー・ローレンスから受け取りました。ダウニー・Jr.は中国系ベトナム人としてアメリカに渡った俳優キー・ホイ・クアンからトロフィーを受け取ると、目も合わせずにその場を立ち去り、ほかの俳優らと握手やあいさつを交わしてそのままスピーチを始めました。

ストーンやダウニー・Jr.には人種差別的な意図はなかったのかもしれませんが。しかしふたりの俳優を批判した人々、とりわけ同様の「透明化」の経験があるアジア系の人々が問題視したのは、まさにそれが「明確な人種差別の意図があるかまでは判別できない、微妙

な差別である」ことでした。同じアジア系として多くの日本人がこの「透明化」に怒りを表明したことは当然だと思いますが、他方で、アメリカの「多様性」はそもそも浅薄なものであり、それを見習おうとしてきた日本のリベラルはおかしいと、日本の現状を肯定するような、保守派のおなじみの論法が出てきたことにも違和感を覚えました。

今回のアカデミー賞授賞式をめぐる一連の論争、またそれに対する日本の反応について、ダニエルさんはどう見ていますか。

竹田 日本での受け止め方については、おっしゃるとおりです。ハリウッドと一口に言っても、映画製作の資金援助をする白人男性のプロデューサーから、今回主演女優賞にノミネートされたネイティブアメリカンのリリー・グラッドストーンのような業界への新規参入者、主にインディペンデントで映画を作っている『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス(通称エプエプ)』のダニエルズ監督(ダニエル・クワンとダニエル・シャイナー)など、本当にいろいろな人たちがいます。加えて、多様化著しい若者の視聴者層も影響力を強めている。

日本の政界と同じで、白人の高齢男性たちが牛耳ってきたアメリカの映画芸術科学アカ

デミィーは、あまり根本的な多様性の推進をしてくれませんでした。アメリカが日本と違うのは、その状況を変えようとする声当事者だけでなく、社会全体で多方面から上がっていること。私がいつも気になっているのは、日本ではどうも「白人中心社会を維持したい層」と、「それを変えたい層」が一緒くたに「アメリカ」として認識されているということです。

一方で、アジア系が白人から無視や疎外をされてきた歴史が、今回、日本でここまで話題になったのには驚きましたし、変化の兆しを感じました。もちろん「この程度は差別じゃない」とか「気にしすぎ」という人も一定数はいましたが、少し前なら、話題にもならなかったでしょう。このところ、アメリカ在住のアジア系女性や有名人がアジア系への厳然たる差別の事実について発言するようになったので、日本にいる人たちも、「そういうことがあるんだ」と徐々に認識するようになり、今回の反応につながったのでしょうけれど、2021年、コロナ・パンデミックに関連したアジア系差別に対抗して起きた「Stop Asian Hate」運動では、「私たちは日本人だから関係ない」という反応が多かったことを思うと、隔世の感があります。

日本人の中には、アカデミー賞を受賞したミシェル・ヨーやキー・ホイ・クアンには「アメリカに認められた」人たち、というイメージがあるのだと思います。アカデミーに認められたんだから、自分たちも「すごい」と言っているいい人たちなのだ、と。そういうすごい人たちでもこんなに冷たい仕打ちを受けるのか、これはひどい、と言えるようになった雰囲気を感じます。いずれにしても、これまで延々と差別されてきたアジア系の人たちのことがここまで話題になったのは、新しいし、ある意味よい兆しだなとは思いつつ……。

三牧 「受け入れられている」と思っていたアメリカに「拒絶された」ことのショックといえば、コロナ・パンデミックが拡大した初期を思い出します。「コロナ・ウイルスは中国から来た」と、当時のトランプ大統領や共和党議員たちが政治的な意図を持って盛んにはやしたたたこともあり、アジア系が差別や暴力の対象になりました。被害者には日系もいましたが、そのときにも日本では、「対象はあくまで中国人であって、我々日本人はアメリカから受け入れてもらっている。日系アメリカ人が攻撃されたのは、中国人と間違われたからだ」という反応が見られました。アジア系を差別し、排斥することの不当性こそが問題なのに、「日本人はアメリカに受け入れられている」ということに固執する、「名誉

白人」意識ともいえます。

しかしその後、経済から文化に至るまで、日本はアジア諸国の中で決して優位な地位にはいないことが、目に見える形で明らかになってきた。日本人が根強く抱いてきた「名譽白人」としての意識を成り立たせる客観的な条件がいよいよ消失してきたことで、むしろ以前より、他アジア諸国の人々との関係をフラットに見られるようになってきた。今回、ミシエル・ヨーやキー・ホイ・クアンへの差別に対し、日本からも続々と怒りや批判が上がったことは、ようやくアジア人差別を自分ごととして受け止められるようになってきたということでもあるのかもしれない。

◆日本の保守派に見えていないもの

竹田 でもやっぱりまだ温度差はかなりあるんですね。アメリカ国内では『ゴジラ マイナス』<sup>ワン</sup>で視覚効果賞を受賞した山崎貴監督たかしのスピーチ中、時間制限を告げる音楽を流したことが不適切だったと問題になりました。英語でのスピーチが強制されるような雰囲気はよくない、英語を母語としない人のためにもっと時間を取るべきだといった意見が、英語



圏のX(旧Twitter)では盛んに出たことに、アメリカの大きな変化を感じました。

しかしSNSでの反応を見ると、日本人からの「長いスピーチは遮られて当たり前でしょう」というコメントも見受けられて、少し驚きました。「ルールを守るのが当たり前」と強者側に立とうとする人、他人を見下して的外れに批判したい人が日本にはかなり多く、そのことが表れた一例でもあると思います。逆に、アジア系が差別されるアメリカの状況を見た日本の反リベラル的な人たちが、「やっぱりポリコレ(ポリティカル・コレクトネス)なんて意味ないじゃん」と、堂々との外れな発言をしているのにも辟易へきえきしました。

三牧 「ポリコレ」批判の材料を見つけるために、手ぐすね引いて待つているような感じですね。一方、アメリカでは今回、アジア系への無意識の差別が改めて問題とされ、さらには、受賞スピーチが英語に限定されているのはどうなのか、英語が母語ではない人が想定されていないのではないかとという議論に発展し、さらには「我々が大切にすべき多様性とは何か」という高次の論争まで生み出されている。日本の保守派はそこを見ないまま、「リベラルがいつも多様性のお手本にしているアメリカだって、所詮この程度だ」と、自分たちがポリコレや多様性について前進しない理由にしようとしている。日本では強者で

ある自分も、アメリカに行けば途端に弱者になりうるものが今回突きつけられたにもかかわらず、この構造を問題視するのではなく、「私は日本にいるから大丈夫です」という形で割り切ってしまう。

日本のリベラルも、アメリカを手放しで称賛しているわけではありません。アメリカも、多様性をめぐってはまだまだ不徹底な部分や、見えていない部分も多い。アジア系差別やパレスチナ人差別があることもお話ししてきましたとおりです。でも問題に気づいた人たちが次々と声を上げて、問題を指摘し、常に議論がされている。こういう議論の中から、前進が生まれてくる。そういう議論のカルチャーは、日本ももっと取り入れていくべきだと思います。

アメリカはアメリカで多くの問題を抱えているけれど、その問題をしっかりと見据えて乗り越えようとしている人たちもたくさんいる。それなのに、日本ではアメリカの暗部だけを見て「これがアメリカだ」と決めつけ、日本社会が変わらないことの理由に使おうとする人が多い。今回のアカデミー賞をめぐってポリコレへの冷笑や多様性をめぐる揶揄やゆが起きたことも、そうしたアメリカへの決めつけの典型例だと感じます。